

第5回研究大会・総会報告

2000年3月19日(日)早稲田大学体育局で行われた第5回研究大会・総会の様子をまとめてみました。当日、午前の部ではシンポジウムが行われ、午後の部は総会で始まり研究発表、コミュニケーション・アゴラ、そして懇親会と盛り沢山の行事が行われた。総合司会の小川氏(福島大学)の進行で、約110名を上回る参加者の熱気に満ちた話し合いで、充実した研究大会・総会であった。

<シンポジウム> 午前10:00-12:00

今回のシンポジウムは「バレーボール発展のための企業チームからの提言」というテーマで、土肥 康宏氏(オレンジアタッカーズ部長)、葛和 伸元氏(NECレッドロケッツ総監督)、津雲 博子氏(NECレッドロケッツ)の3人の方々に提言をいただいた。シンポジウムでは福原氏(筑波大学)の司会進行により進められ、大変活発に議論された。ここでは、提言された方の抄録並びに発表要旨をまとめて報告と致します。

(編集委員 高橋宏文)

1. トップアスリートを育てるためのVリーグ改革 —これからの市民社会が求めているトップアスリートとは—

土肥康宏氏(オレンジアタッカーズ部長)

はじめに土肥氏は、オレンジアタッカーズ創部における理念について次のように語った。企業でチームをもつというかたちではあったが、80年代初頭に「世界のトップを目指すチームづくり、環境づくり」という理念を掲げ創部を行った。つまり、当時の世界のアスリート界の標準を目標とし、五輪からアマチュア規定がなくなった、当時のアスリート界の標準に合わせたチームづくりであった。

徹底したプロ指向のチームが創設(1982年)された当時、五輪憲章からはアマチュアという概念が消え、世界の競技スポーツでは、プロフェッショナルなトップアスリート達がしのぎをけずり、五輪を目指していた。従って「世界のトップを目指すチームづくり、環境づくり」という理念を掲げたオレンジアタッカーズが、競技スポーツにおけるグローバルスタンダードである「プロ意識に徹する」という考え方を押し進めていくのは、極めて自然な成り行きであった。

- 競技スポーツにおける欧米の技術、思想を導入するため、世界レベルの指導者としてアリーセリンジャー氏を招聘。
- 専用体育館建設には世界のスタンダードを意識し、トレーニングルーム、メディカルルームを整備。
- チーム運営面では監督を中心としたスタッフ編成を行い、チームの組織力を強化。
- チーム強化面では海外遠征、海外チームの招聘など、常に世界への視野を持つことを指導者から選手まで浸透させることを狙った。

次に、アマチュアとプロという問題について述べる。この問題については、バレーボール協会では先送りされてしまっており、チームがオレンジアタッカーズとして再出発

してからは、選手とチームはプロ、リーグ運営はアマというスタンスになっている。さらに、Vリーグにおける興行収入や放映権料が、チームへ還元されることもない。たとえば、Vリーグの現状の運営コストには、実際には計上されていないが、チーム年間維持コストから逆算した金額から、一試合興行当たりのチームの出演費というものを試算すると、1興行=2試合4チームの試合の場合、4チームが負担している額は、約1億円にのぼる。従って、1試合興行当たり数百万円の券売収入という現在のVリーグだけでは、チームの経費はとうていまかなえるものではない。

興行収入だけでは生きていけない、バレーボールのようなインドア競技チームが生き残るためには、これからはメディアのコンテンツとしての情報価値を作り上げていく以外に方法はないと思われる。ナショナルチームの強化はもちろんだが、広く市民を巻き込む情報発信、広くファンを獲得するプロモーションをリーグ、チーム、選手が一体となっておこなわなければならない。オレンジアタッカーズはファンクラブの運営、グッズ販売、バレーボール教室などを通じて、まずは市民の中での「話題づくり」からはじめようとしている。

質問：サッカーや野球のやり方を参考にした点は？

状況がかなり違うので、直接的には参考にできない。現在の状況で収入について考えるとすれば、チームあるいは選手の肖像権の利用程度しかないのが現状である。

2. 新たな企業スポーツ像に向けて

葛和伸元氏(NECレッドロケッツ総監督)

NECでは女子バスケット、女子柔道、アメリカンフットボール部は不況のあおりを受けて廃部になっている。これまでの企業スポーツが謳われた社員の意識高揚だけではチームを存続させるにも厳しい状況がある。それには、ス

スポーツ活動の価値を作ることである。社会生活の中でスポーツや文化に触れることが一つの余暇として価値があると考えられる。したがって、スポーツ活動を通して NEC の社員、家族が一体感を持つことが必要となる。そして、その価値観に答え続けるには、常に良い成績を収めることである。また、他の存在意義としては社会還元が考えられるが、このことについては達成できていない点であるとした。よって、現在の状況などから言えることは、存在価値を生むための自分達の役割を創造し、どう果すかという点については模索しているところである。

また、バレーボール界の問題として大会運営という点ではアマチュアリズムから協会が脱却できていないところである。もっとスポーツの価値というものを引き上げる発想が必要である。それには、スポーツを観戦することで視覚的情報により観客がコミュニケーションを図ることを理解し、このコミュニケーションが文化になるという点に着目すべきであるとしている。こうしたことを含め、バレーボールをメディアスポーツとして確立することが必要であるとしている。さらに、欧米のスポーツ観戦では会場に行くことですでに楽しむことができ、日本のようにアリーナの中で飲食やアルコールが禁止されているようでは、それを実現するには難しい状況である。今後は選手の置かれている環境をより良くするという意味でも、スポーツの在り方の見直し、インターナショナルに堪えうる文化としてのスポーツの価値を確立し、さらにスポーツへどのような方法で企業に関わるかを考えていかななくてはならないと語った。

質問：ナショナルチームと企業の関わりまたはその強化方法。
関わりという点では報酬はチームから出ているという点。また、強化という面では、選手には現在のシステムの中では名誉、誇りを大切にし気持ちはアマチュアで、技術はプロというつもりで取り組んでもらいたい。
質問：全企業でナショナルチームの強化を分担しては？
財政面、企業の置かれている状況から非常に難しい。



左から、津雲、葛和、土肥氏

3. リベロについて

津雲博子氏 (NEC レッドロケッツ)

私は高校までは無名の選手であった。前に所属していたチームが廃部になり NEC に移籍した。企業のチームではスパイカーとしてプレーし、一昨年の世界選手権からナショナルチームではリベロとしてプレーすることになった。リベロの役割の一つはベンチからの指示をコートに伝えることである。また、プレーに関してはレシーブのみなので、リズムが悪くなると修正が難しいという面もある。しかし、背の低い人にもバレーボールで活躍できるポジションがあるということで、夢を与えられるポジションだと思ってがんばっている。

質問：世界のスパイカーと日本のスパイカーとの違いは？

まず打点の高さが異なる。そして、特に日本のバレーボールでは速い展開の中でのレシーブが要求される。

質問：リベロプレーヤーとしてプレーのリズムの保ち方？

心理面の整理はゲーム前、ゲーム中でも行なっている。

質問：レシーブでのテーマは？

打球の速さに慣れること。これは視覚能力の問題だと思っている。

質問：気分転換は？

チームに戻ったときにスパイクを打たせてもらうことでプレーヤーとしての気分転換をしている。

質問：練習方法は？

特にサーブレシーブは身体に覚えこませるように反復練習を行なうことである。

質問：ジャンプサーブとフローターサーブにおける差は？

打球の速度が異なるため飛来時間の差がある。また、ジャンプサーブは正面にすればレシーブし易いが、長い距離のフローターサーブは変化が読みにくい。したがって、変化球サーブのほうが有効だと考える。

質問：レシーブの形は男女で違うのか？

異なると考える。

質問：欧米の女子選手と日本の女子選手のレシーブについて違いはあるか？

身長の違いからかアジアの選手は膝を使うが、欧米の選手は打球の軌道へ手を出している。